令和６年度学生支援プロジェクト事業成果報告書

盆栽の輪を広げよう！
～高校生とともに育む高松盆栽～

代表者　　木　元　さ　く　ら　（経済学部経済学科２年）

１．目的と概要

現在、海外において日本の文化や伝統工芸は『cool Japan』と評価されており、盆栽も『BONSAI』の表記で海外からの人気が高まっている。

一方で、香川県高松市は松盆栽の全国シェアの約８割を占める名産地であるにも関わらず、国内における高松盆栽の知名度は低く、若い世代には親しみがない、後継者不足という問題を抱えているのが現状である。これらの背景には、一般的に盆栽に対して抱かれる「男性」「高齢者」「高価」のような親しみにくいイメージが影響していると考えられる。

そこで、世間のイメージとは正反対の私たち女子大生が、プロの盆栽作家と盆栽に興味を持つ初心者を繋ぐ架け橋のような存在となり、高松盆栽の認知度向上を目指すことを目的として活動している。今年度は、香川県内外の高校生をメインターゲットとして、苔玉作り体験のワークショップを開催した。

２．実施期間（実施日）

令和６年７月３日から　令和７年３月３１日まで

３．成果の内容及びその分析・評価等

今年度の事業では、香川県内外の高校生をターゲットとした苔玉作り体験のワークショップを行った。計６回のワークショップを実施し、総参加者は１０７名となった。高校生向けワークショップでは、普段の活動で行っている苔玉作り体験に加えて、香川大学の特徴やプロジェクト活動の紹介、大学生活や受験のアドバイスなどを行う時間を設けた。高松盆栽だけでなく香川大学の魅力も伝えられる機会にもなったと考えられる。高校生向けワークショップの内容としては、高松盆栽や私たち Bonsai☆Girls Project の活動についての説明、苔玉作り体験、大学やプロジェクトの紹介と高校生との交流会である。交流会では座談会形式で質疑応答を行うことで、高校生からの大学や受験に関

する多くの疑問に答えられた。

１回目は、7 月 20 日に岡山県立芳泉高等学校で開催した。参加者は 25 名であった。通常よりも短い時間でのワークショップだったが、事前に段取りを明確に決めていたため、スムーズに進行できた。参加者のなかには、以前に私たちのワークショップに参加したことのある高校生もおり、その再会がとても嬉しく感じられた。また、活動が着実に広がっていることを実感し、さらに意欲が高まり、大きな励みとなった。一方で、進行に集中するあまり、作業風景の記録撮影が十分にできなかったため、今後は意識的に記録撮影する必要があると反省した。

２回目は、12 月 12 日に英明高等学校の生徒 3 名を対象に開催した。参加者はもともと盆栽に興味を持っており、そうした高校生との交流は私たちにとっても刺激となった。一方で、当日の準備時間が十分ではなく、進行に戸惑う場面もあった。この経験を通じて、余裕を持ったスケジュールを立てることの重要性を改めて認識した。

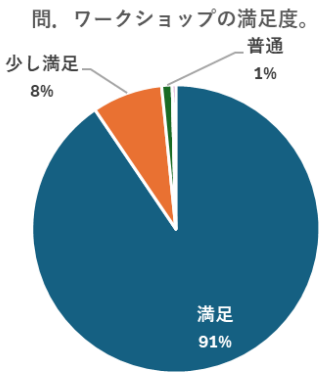
３回目は、12 月 18 日に香川県立観音寺第一高等学校で開催した。参加者は生徒 11 名、教員 2 名の計 13 名であった。準備、進行、片付けのすべてを円滑に行うことができた。しかし、参加者の多くが 1・2 年生で進路について具体的に考えていない高校生が多かったため、座談会では会話に戸惑う場面も見られた。より満足度の高い座談会にするために、事前に参加者の学年を把握し、適切な話題を提供できるよう準備したい。

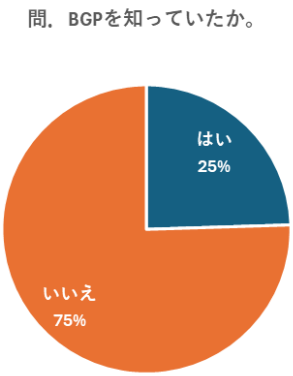
４回目は、12 月 20 日に香川県立丸亀高等学校で開催した。参加者は生徒 10 名、教員 1 名の計 11 名であった。座談会では活発な意見交換が行われ、予定よりも時間が延びるほど盛り上がった。今後も参加者が話しやすい雰囲気を大切にしつつ、時間配分にも工夫していきたい。一方で、当日は体調不良によるメンバーの欠席があり、少人数での対応となったが、事前準備のおかげで問題なく進行できた。こうした急な欠席にも対応できるよう、補欠メンバーを事前に確保する体制を整えたい。また、多くが理系の高校生だったため、今後はメンバーの学部に偏りが出ないように調整する必要があると感じた。

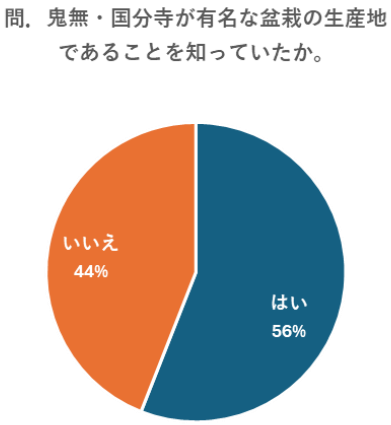
５回目は、2 月 17 日に香川県立高松商業高等学校で開催した。参加者は 36 名と多かったため、グループ分けをしてメンバーの配置を分担して対応した。ワークショップ後、参加者から「盆栽に対するイメージが変わった」という意見をもらい、目的のひとつである盆栽に対する認識の向上が実現できたと感じた。また、香川大学に興味を持ってもらう機会となったと感じている。参加者の多くは推薦入試に関心がある高校生であったため、幅広い入試形態に関する知識をつけておく必要があることを実感した。

６回目は、2 月 28 日に香川県立高松東高等学校で開催した。参加者は生徒 15 名、教員 4 名の計 19 名であった。事前に役割分担をし、円滑にワークショップを進めることができ、座談会も盛り上がりを見せた。しかし、反省点としては、苔玉作りの進捗に差が生じてしまったことが挙げられる。進行役が全体の進捗を俯瞰し、進捗に応じて適切に指導者へサポートを促すことで、進捗の偏りを抑えるよう努めたい。

以上のように、高校生を中心に多くの人が盆栽に触れる機会を創出できた。今年度は初めてワークショップを実施した高等学校も多くあり、活動の範囲が広がった。アンケート結果からは、参加者の満足度は高い一方で、高松盆栽の認知度は６割程度、私たち Bonsai☆Girls Project の認知度については全体の半分も満たしていないことが分かった。昨年度と比べると割合は上昇しているものの、まだ認知度が低いことが分かった。今後も事業を継続することで、盆栽の魅力を伝える機会を創出し、高松盆栽や私たち Bonsai☆Girls Project の認知度向上だけでなく、地域の方々とのつながりをさらに深めていきたい。







４．この事業が本学や地域社会等に与えた影響

このプロジェクト事業を実施したことにより、高松盆栽の認知度だけでなく、香川大学やBonsai☆Girls Projectの認知度も向上させることができたと感じている。今年度はメンバーの母校を中心に、香川県内外の高校生を対象にワークショップを実施したため、県外の高校生に高松盆栽の存在を知ってもらうとともに、県内の学生にとっては地元の魅力を再認識する機会となった。高校生向けのワークショップでは、苔玉作りに加え、香川大学の紹介や他の地域活性化プロジェクトの紹介なども行った。これにより、大学受験を控える高校生に香川大学の魅力や香川大学ならではのプロジェクト活動について知るきっかけを提供することができたと感じている。また、自身のSNSでの情報発信や地元インターネットメディアである「ガーカガワ」による取材、地元タウン誌「NICETOWN」での毎月連載、テレビ出演（全国、西日本、関西圏、地元）などを通じて、高松盆栽や香川大学の地域活性化プロジェクトの魅力を広くPRすることができた。

地域社会に与えた影響としては、香川の名産品である高松盆栽を通じて、鬼無や国分寺地区といった地域の活性化に貢献することができたと考える。次世代に盆栽の魅力を発信することで、冒頭に述べたような盆栽業界が抱える課題の解決にもつながると考える。また、定期的な盆栽教室やワークショップの開催により、地元の盆栽作家や企業、学校等とのつながりが生まれた。さらに、プロジェクト活動を通して、私たち学生も責任感や協調性など社会に出て役立つ能力を培うことができたと感じている。

５．自分たちの学生生活に与えた影響や効果等

今年度開催したワークショップは、昨年度に引き続き、高校生を対象としたものであった。高校生向けワークショップはこれまでの活動で行っていたことから、メンバー間で意見を出し合い、従来の形式に新たな要素を取り入れることを目指した。その結果、香川県外の高校や初めて関わる高校でワークショップを実施し、活動範囲が広がったことを実感した。また、香川大学の紹介や大学生活についてのプレゼンテーション、高校生との交流を通して、参加者から高い評価を得ることができた。参加者から前向きなフィードバックを受けることで、活動の意義を改めて感じるとともに、大きな自信につながった。私たち学生にとっても、表現力やコミュニケーション能力を向上させる貴重な機会となった。特に、メンバー同士で意見を交わしながら準備や運営を進めたことで、協力する力や役割分担の重要性を学ぶことができた。また、マニュアル化された活動に新たな要素を加えることで、より主体性や発想力が身についたと考える。決まった流れに従うだけでなく、自ら改善点を見つけ、工夫を加えることで、より良いワークショップを作り上げる意識が芽生えた。この経験を通じて、単に与えられた業務をこなすのではなく、自ら考え、試行錯誤しながら行動する力を養うことができたと感じている。さらに、ワークショップ後には必ず振り返りを行い、反省点や課題を明確にし、プロジェクト内で解決策を模索することで、次回のワークショップに活かした。また、高校の教職員の方々との交流を通して、礼儀作法やマナーについても学ぶことができた。

６．反省点・今後の展望（計画）・感想等

今年度の反省点は大きく２つある。

１つ目は、苔玉の作り方の説明や指示出しが曖昧になっていた点である。私たちはプロの盆栽作家から直接、盆栽に関する知識を教わり、実際に苔玉作りを行う盆栽教室を定期的に行っているが、今年度は頻度が少なかったことが原因と考えられる。来年度は盆栽教室の実施予定表を作成し、頻度を増やして作り方の再確認を行いたいと思う。さらに、メンバー間でもワークショップ前に作り方の説明練習を行い、改善を図りたい。

２つ目は、ワークショップの集客に関する問題である。ワークショップの実施が可能であるにもかかわらず、参加希望者が集まらず、実施を断念した高校がいくつかあった。今年度はワークショップの開催場所の決定に時間を要し、全体の活動に遅れが生じた。結果として、高校へワークショップの開催交渉の連絡から当日までの期間が短くなり、参加者募集の時間を十分にとることができなかった。今回の反省を踏まえ、来年度以降はワークショップの開催場所を決める際に計画に遅れが生じないように交渉を早めに開始し、予備の候補先を決めておくなど、時間に余裕を持った対応を心掛けたいと思う。また、参加者を募集する際に使用するチラシも、より興味引く内容に改善したい。

一方で、今年度、実際にワークショップを実施した高校や、開催が実現しなかった高校も含め、お声がけした多くの高校から、来年度以降の開催にも期待していると声をかけていただいた。これらの反省点を踏まえて、今後はこれまでのワークショップに新しい要素を加えながら、より質の高いワークショップを実現できるよう、メンバーで案を出し合い、さらに改善を重ねていきたいと思う。

７．実施メンバー

代表者　木元　さくら（経済学部２年）

構成員　植田　菜月（経済学部４年）
香川　夏実（経済学部４年）
河原　由衣（経済学部４年）
美馬　妃華（経済学部４年）
渡部　里莉花（経済学部４年）
竹本　理世（経済学部３年）
芦内　奈菜（経済学部２年）
伊丹　礼（経済学部２年）
西崎　玲音（経済学部２年）
猪谷　蒼月（法学部２年）
三好　菜月（創造工学部２年）
岡　瑞希（経済学部１年）
石井　遥奈（農学部１年）
湯藤　飛鳥（教育学部１年）
福田　桃子（法学部１年）
應江　あかり（経済学部４年）
川原　つかさ（経済学部４年）
桑原　優月（経済学部４年）
森前　ひなた（経済学部４年）
大井　香穂（経済学部３年）
嶋津　千咲（創造工学部３年）
池井　あずさ（経済学部２年）
妹尾　萌花（経済学部２年）
森本　美咲（経済学部２年）
岡嶋　羽菜（創造工学部２年）
石原　果穂（経済学部１年）
鴨井　咲來（経済学部１年）
玉水　佳凛（農学部１年）
甲斐　楓（創造工学部１年）

８．執行経費内訳書

配　分　予　算　額		１９７，８２０円		
執行経費（品目等）	数量	単価(円)	金額(円)	備　考
苔玉材料（７月２０日分）	２５	２，２００	５５，０００	
苔玉材料（１２月１２日分）	３	２，２００	６，６００	
苔玉材料（１２月１８日分）	１３	２，２００	２８，６００	
苔玉材料（１２月２０日分）	１１	２，２００	２４，２００	
苔玉材料（２月１７日分）	３１	２，２００	６８，２００	
ETC通行料金（７・８月分）			４，８２０	
ETC通行料金（９・１０月分）			８，１６０	
交通費（１２月２０日分）	３	６３０	１，８９０	
合　　計			１９７，４７０	